

# 大学新入生における共感性, 共同体感覚, 特性的自己効力感, 自律性欲求の経時変化 — 短期的縦断調査より —

## Changes Over Time in Interpersonal Reactivity, Social Interest, Trait Self-efficacy, and Need for Autonomy in University Freshmen : A Short-term Longitudinal Study

鳥井 淳 貴\*      中須賀 巧\*\*  
TORII Junki      NAKASUGA Takumi

本研究の目的は, 大学新入生の共感性, 共同体感覚, 特性的自己効力感, 自律性欲求の経時変化について, 性別による違いを考慮した検討をすることである。大学生 96 名 (平均年齢  $18.40 \pm 0.55$  歳: 男子 66 名, 女子 30 名) に対して, 日本語版対人反応性指標, 共同体感覚尺度, 特性的自己効力感尺度, 自律性欲求尺度を用いて調査を実施した。調査の初回時と最終回時の心理的要素 (共感性, 共同体感覚, 特性的自己効力感, 自律性欲求) を分析項目とし, 二元配置分散分析を実施した。主な結果は以下のとおりである。(1) 「個人的苦痛」は男子と女子の調査初回時には差がなく, 最終回時には男子よりも女子の方が高い傾向であり, 男子は前期期間を通して有意に低下した。(2) 「所属感・信頼感」は, 女子にだけ有意な向上が確認された。(3) 「独立」では, 男子は前期を通して有意に向上した。以上のことから, 大学新入生の心理的要素は, 性別によって異なる経時変化を示すことが明らかになった。

キーワード: 大学新入生, 心理的要素, 経時変化

Key words: university freshmen, elements of psychology, changes over time

### I. はじめに

近年の世界的規模での激しい社会的変化の情勢を鑑みると, 社会進出への最終段階とされる高等教育の役割は, 変化への適応力を育成する観点からも依然として重要とされる (文部科学省, 2018)。文部科学省中央教育審議会答申の「学士課程教育の構築に向けて」(2008) では, 社会のグローバル化やユニバーサル段階に達した大学教育の現状を踏まえ, これらに柔軟に対応できる人材を育成するために学士課程で養成すべき能力として, 知識・理解, 汎用的技能, 態度・志向性, 統合的な学習経験と創造的思考力の 4 分野 13 項目からなる「学士力」を提言している。また, 経済産業省 (2018) からは, 人生 100 年時代を踏まえ, 職場や地域社会で多様な人々と仕事をするために必要な基礎的な能力として, 前に踏み出す力 (アクション), 考え抜く力 (シンキング), チームで働く力 (チームワーク) といった 3 つの能力で構成される「社会人基礎力」を提言している。さらに, 内閣府 (2003) からは, 自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力として, 知的能力的要素, 社会・対人関係的要素, 自己制御的要素の 3 つで構成されている「人間力」が掲げられている。これらの能力に共通するものとして, 学生の主体性や積極性といった自律的な態度, 他者と協同して課題に取り組むといった協調性, そしてその課題を解決するための実践的な能力であると考えられる。しかし, 大学に入学してくるま

での高大接続の移行段階で, 学習習慣の身につけていない, 学習目的が明確ではない, 学習意欲が低いといった学生の多様化に伴って (濱名, 2008), 先の能力養成の妨げになることが推測され, 大学での学びの系統性を踏まえると早期にこれらの問題に着手すべきであると考えられる。

特に大学 1 年生の時期は「初期適応」の時期とされており, 学業面 (目標意識の喪失や履修・学業の困難), 対人関係面 (友達作りの困難), 学生生活面 (過剰適応による疲労), 進路面 (将来への不安) といった多様な課題があるとされる (日本学生支援機構, 2007)。濱名 (2007) は, 1 年生の中でも春学期 (前期) 段階での早期適応が, その後のキャンパスでの学習や生活に影響していることを指摘し, さらに早期適応によってその後も適応感が持続していくことを明らかにしている。また, 広沢 (2007) は, 大学新入生が入学して半年後に学習面で適応できるか否かは, 高校までの学習技術や学習特性と密接に関係していることを報告している。これらのことから, 大学生において 1 年次はその後の学習基盤を形成するための重要な時期であると考えられる。

ところで, 大学生の心理的要素は性別によって違いがあるとされている。例えば, 松浦 (2006) は, 社会的スキル, 共感経験, 援助経験と新たに遭遇する援助場面での援助行動発動時にどのような影響を及ぼすのかを検討し, 共感経験は女子の方が男子よりも高く, 共感不全

\* 宝塚医療大学

令和 3 年 7 月 9 日受理

\*\* 兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻生活・健康・情報系教育コース 准教授

経験は男子の方が女子よりも高いことを報告している。また、大久保（2005）は、個人と環境の適合性の視点から学校環境に適合しているかを測定できる青年用適応感尺度を開発・使用し、下位尺度の「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」は大学生においては女子が男子よりも高く、より大学環境に適応していることを明らかにした。さらに、大学生および成人の自立性および自律性には、性別によって違いがあることが明らかにされている（福島, 1997; 大石ら, 2007, 2008）。このように、大学生の心理的要素は性別によって異なる様相を示す可能性がある。これらを踏まえると、大学生の心理的要素を把握する上で、性別を考慮した検討が必要になると考えられる。しかし、大学生の入学初期に着目し、性差を検討した研究は見受けられるが、あくまで横断的研究が中心であり、経時変化を捉えた縦断的研究は少数しか見受けられない。先に示した「学士力」、「社会人基礎力」、「人間力」に共通する能力の養成をスムーズに行い、より良い人材を社会進出させるためにも、これらの知見を蓄積していく必要が考えられる。そこで、本研究では自律的な態度や協調性、課題解決に向けた実践的な能力を捉える側面として「共感性」、「共同体感覚」、「自己効力感」、「自律性欲求」の4つの心理的要素に着目した。まず、「共感性」は、感情的な側面と認知的な側面から構成される複合的な概念として捉えられており、他者理解や援助を促進し、攻撃行動を抑制するなど、社会生活を支える重要な能力の1つとされている（日道ほか, 2017）。次に、「共同体感覚」は、Adlerの個人心理学における中心的な概念であり、野田（1988）によって「所属感」、「信頼感」、「貢献感」、「自己受容」といった4つの側面で構成されることが示されている。高坂（2012）は、共同体感覚が高社会的行動と正の関連を示し、社会的迷惑行動の中でもルールやマナーを破る行動とは負の関連を示すことを明らかにしている。したがって、これら2つの心理的要素は他者との関わりが重要とされるため、協調性に関係することが推測される。続けて「自己効力感」は、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指し、自己効力感を自分がどの程度持ち合わせているかが、個人の行動の変容を予測し、不適応な情動反応や行動を変化させるとされている（Bandura, 1977; 成田ほか, 1995）。これを踏まえると、課題解決に向けた実践力を有しているかの自信に繋がる要素であると推測される。最後に「自律性欲求」は、人間が生得的に有している「自己決定したい」という欲求を指し、自尊感情や学習動機づけとの関連が報告されている（安藤, 2005, 2006; 佐藤, 2012）。つまり、大学での主体的・積極的な学びに必要な自律的な態度の養成に向けた重要な要素であると考えられる。

以上のことから、本研究では入学した直後の時期に着目し、大学新入生の心理的要素（共感性、共同体感覚、自己効力感、自律性欲求）の経時変化について、性別による違いを考慮した検討をすることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 調査対象者および調査時期

関西地区の私立大学（1校）に在籍している新入生を対象に、2019年4月上旬と7月中旬の計2回質問紙調査を実施した。回答に欠損の無かった96名（平均年齢18.40 ± 0.55歳：男子66名、女子30名）を分析対象とした。

### 2. 調査内容

#### 2-1. 基本属性

フェイスシートにて、基本的属性（性別、年齢、学籍番号）について回答を求めた。

#### 2-2. 日本語版対人反応性指標

共感性を測定するために、日道ほか（2017）が作成した日本語版対人反応性指標を使用した。この尺度は、共感の特性を複合的に測定する尺度として知られている対人反応性指標（Davis, 1980）の日本語訳版である。同情などの他者指向的感情の喚起されやすさを示す「共感的関心」（7項目）、他者の視点に立ちその他者の気持ちを考える程度を示す「視点取得」（7項目）、他者の苦痛の観察により自己に生起される不安や恐怖にとらわれてしまう程度を示す「個人的苦痛」（7項目）、物語などのフィクションの登場人物に自分を置き換えるよう想像する傾向を示す「想像性」（7項目）の下位尺度から構成されている。回答形式は5件法で、「全く当てはまらない」（1点）から「非常によく当てはまる」（5点）で求め、分析には各下位尺度得点を用いた。

#### 2-3. 共同体感覚尺度

共同体感覚を測定するために、高坂（2011）が作成した共同体感覚尺度を使用した。この尺度は共同体感覚を構成する「私は共同体の一員だ」という感覚とされる所属感、「共同体は私のために役に立ってくれるんだ」という感覚とされる信頼感、「私は共同体のために役立つことができる」という感覚とされる貢献感、「私は私のことが好きだ」という感覚とされる自己受容を測定するものである。現在所属している集団やその成員を信頼できている感覚、または信頼できる集団に所属できている感覚を示す「所属感・信頼感」（10項目）、現在の自分自身を肯定的に受け入れていることができている感覚を示す「自己受容」（6項目）、人に対して主体的に貢献することができている感覚を示す「貢献感」（6項目）の下位尺度から構成されている。回答形式は5件法で、「全く当てはまらない」（1点）から「とても当てはまる」（5点）で求め、分析には各下位尺度得点を用いた。

#### 2-4. 特性的自己効力感尺度

自己効力感を測定するために、成田ほか（1995）が作成した特性的自己効力感尺度を使用した。この尺度は、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感を測定するものである。社会的スキルや職業的能力の観点から23項目、1因子構造であることが明らかにされている。回答形式は5件法で、「全く当てはまらない」（1点）から「非常によく当てはまる」（5点）

で求められ、得点範囲の下限は23点、上限は115点となる。したがって、得点が高いほど自己効力感の程度が大きいと判断される。分析には尺度得点を用いた。

2.5. 自律性欲求尺度

自律性を測定するために、安藤（2005）が作成した自律性欲求尺度を使用した。この尺度は、自らの行動を決定し、始発したいという自律性欲求の個人差を測定するものである。自分で考え、決定をしたいという欲求を示す「自己決定」（9項目）、他者に従いたくないという欲求を示す「独立」（6項目）の下位尺度から構成されている。回答形式は5件法で、「当てはまらない」（1点）から「当てはまる」（5点）で求め、分析には各下位尺度得点を用いた。

3. 倫理的配慮

研究の目的および内容について調査対象者に説明をした後、授業時間を利用して第一著者が質問紙調査を実施した。調査票の表紙には本研究への協力は自由意志によること、調査票への回答が途中であっても中断・辞退できること、授業の成績評価とは無関係であることなどが明記され、口頭による説明も行った。また、学籍番号の記載を求めたが、個人情報特定されないID番号に変換されることも記し、全ての項目への回答をもって同意を得られたものと見なした。なお、今回の調査は、研究機関において倫理審査を受けたものではないが、第一著者の所属大学が発行する研究倫理要綱に沿って実施した。

4. 統計解析

各下位尺度の得点について、性別（男子、女子）と調査時期（調査-初回-、調査-最終回-）による二元配置分散分析を実施し、交互作用が認められた場合は、単純主効果の検定を行った。統計的有意水準5%のもと、分析には統計パッケージのIBM SPSS Statistics 24.0を使用した。

III. 結果

性別における心理的要素の経時変化

大学新入生における心理的要素と性別および経時変化との関係を明らかにするために、性別と調査時期（調査-初回-、調査-最終回-）を独立変数とし、共感性、共同体感覚、自律性欲求の下位尺度得点および特性的自己効力感の尺度得点を従属変数とした二元配置分散分析を行った（表1）。その結果、性別および調査時期に対して、個人的苦痛 ( $F(1,94) = 10.70, p = 0.00$ )、所属感・信頼感 ( $F(1,94) = 5.88, p = 0.02$ )、独立 ( $F(1,94) = 5.01, p = 0.03$ ) の交互作用が有意であった。そこで、性別と調査時期それぞれに単純主効果の検定を行った。結果、個人的苦痛（図1）では、「調査-最終回-」では「性別」による有意差が認められた ( $F(1,94) = 8.90, p = 0.00$ )。また、「男子」では「調査時期」による有意差が認められた ( $F(1,94) = 11.39, p = 0.00$ )。多重比較の結果、調査-最終回-における「男子、女子」との間に有意な差が認められた ( $p = 0.01$ )。また、男子における「調査-初回-、調査-最終回-」との間に有意な差が認められた ( $p = 0.00$ )。次に所属感・信頼感（図2）では、「調査-最終回-」では「性別」による有意傾向の差が認められた ( $F(1,94) = 3.23, p = 0.08$ )。また、「女子」では「調査時期」による有意差が認められた ( $F(1,94) = 4.30, p = 0.04$ )。多重比較の結果、調査-最終回-における「男子、女子」との間に有意傾向の差が認められた ( $p = 0.08$ )。また、女子における「調査-初回-、調査-最終回-」との間に有意な差が認められた ( $p = 0.05$ )。最後に独立（図3）では、「男子」では「調査時期」による有意差が認められた ( $F(1,94) = 27.46, p = 0.00$ )。多重比較の結果、男子における「調査-初回-、調査-最終回-」との間に有意な差が認められた ( $p = 0.00$ )。

表1 性別および調査時期における各尺度得点

	男子(n=66名)		女子(n=30名)		交互作用		主効果			
	調査-初回-	調査-最終回-	調査-初回-	調査-最終回-	F値	p値	調査時期 初回・最終回		性別 男子・女子	
							F値	p値	F値	p値
共感性										
共感的関心	25.94 (3.84)	23.56 (3.66)	27.27 (3.34)	26.37 (3.39)	2.92	0.09	14.35	0.00	9.43	0.00
視点取得	22.30 (4.18)	21.70 (3.37)	22.47 (3.42)	22.63 (3.18)	0.74	0.39	0.24	0.63	0.68	0.41
個人的苦痛	20.23 (4.57)	18.73 (3.85)	20.33 (5.08)	21.43 (4.66)	10.70	0.00	0.25	0.62	2.48	0.12
想像性	22.30 (5.40)	21.42 (3.62)	22.73 (6.32)	23.80 (4.26)	2.75	0.10	0.03	0.87	2.47	0.12
共同体感覚										
所属感・信頼感	40.86 (7.38)	39.62 (9.51)	40.17 (6.54)	43.20 (7.91)	5.88	0.02	1.03	0.31	0.85	0.36
自己受容	18.45 (4.50)	19.86 (5.43)	17.57 (4.54)	18.37 (4.33)	0.30	0.59	3.94	0.05	1.74	0.19
貢献感	25.09 (4.86)	25.21 (5.45)	25.57 (4.02)	26.33 (4.85)	0.31	0.58	0.59	0.45	0.75	0.39
特性的自己効力感	70.73 (12.51)	70.06 (10.13)	72.60 (11.09)	71.00 (8.33)	0.26	0.61	1.55	0.22	0.40	0.53
自律性欲求										
自己決定	33.39 (5.30)	32.05 (5.95)	34.47 (4.83)	34.17 (5.38)	0.83	0.36	2.06	0.16	2.27	0.14
独立	15.26 (3.20)	17.38 (3.38)	15.87 (3.77)	16.37 (3.02)	5.01	0.03	13.10	0.00	0.10	0.75

( )内は標準偏差



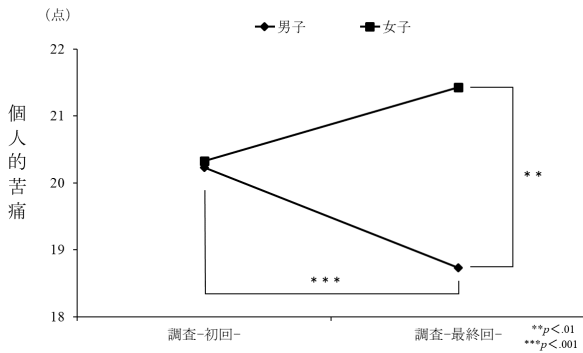


図1 各性別の調査時期における個人的苦痛の経時変化

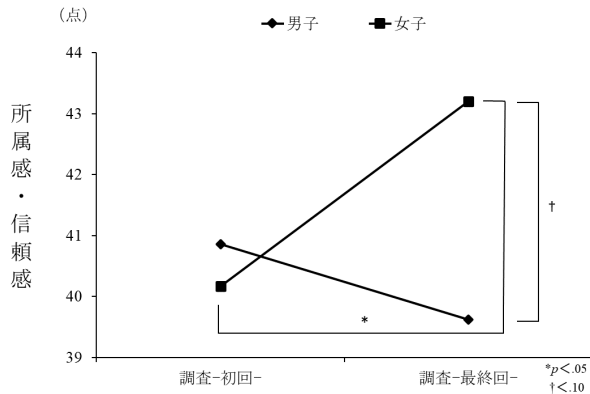


図2 各性別の調査時期における所属感・信頼感の経時変化

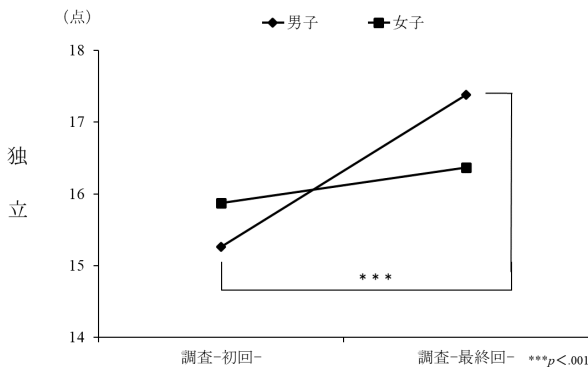


図3 各性別の調査時期における独立の経時変化

#### IV. 考察

本研究では、大学新入生の共感性、共同体感覚、特性的自己効力感、自律性欲求の経時変化について、性別による違いを考慮した検討をすることを目的とした。調査の初回時と最終回時の共感性（共感的関心、視点取得、個人的苦痛、想像性）、共同体感覚（所属感・信頼感、自己受容、貢献感）、自律性欲求（自己決定、独立）の各下位尺度得点と特性的自己効力感の尺度得点を分析項目として、二元配置分散分析を実施した。その結果、「個人的苦痛」における男子と女子の調査初回時には差がなく、最終回時には男子よりも女子の方が有意に高いことが認められた。また、有意傾向ではあるが「所属感・信頼感」においても同様の傾向が見られた。したがって、前期末での共感性や共同体感覚は女子の方が高く認知

している可能性が考えられる。加えて、男子の「個人的苦痛」は大学生生活を通して有意に低下し、「独立」は向上したが、女子には認められなかった。一方で、「所属感・信頼感」については、女子にだけ有意な向上が認められた。以上のことから、大学生生活の前期期間を通じた心理的要素は、性別によって違いが認められる可能性が示唆された。以下、それぞれの共感性、共同体感覚、特性的自己効力感、自律性欲求の順に考察を進める。

まず、共感性における「個人的苦痛」は、他者の苦痛の観察により、自己に生じられる不安や恐怖にとらわれてしまう程度を表しており、男子は大学生生活を通して有意に低下していた。一方で、「個人的苦痛」は、悲しんでいる相手とその悲しみを共にし、悩んでいるときには悩みを共にすることができ、このことが相手に対する思いやりある行動の動機づけとなる側面も有しているとされている（井芹, 2017）。したがって、ネガティブな側面がある反面に、共感的な行動の始発になる可能性が含まれているため、高めるべき視点とも考えられる。また、松浦（2006）は、援助行動発動時における社会的スキル、共感経験、援助行動経験の影響について検討し、共感経験尺度における共有経験得点は女子の方が男子よりも高く、共有不全得点は男子の方が女子よりも高いことを示した。つまり、他者に対する共感性は女子の方が高いことを示唆しており、本研究の結果と一致するものであった。

次に、共同体感覚では、高坂（2011）は「所属感・信頼感」得点において女子の方が男子よりも得点が高いことを報告しており、本研究の結果からも同様の傾向が確認された。特に、女子の得点においては大学生生活を通して有意に向上していた。「所属感・信頼感」は、所属している集団やその成員を信頼できている感覚を意味するものであり、他者や集団からの影響が含まれている（高坂, 2011）。大学生活内での友人関係、サークル活動といった関わり合いの中で小グループを形成し、それが時間を経て親密になっていくことによって信頼感を感じるまでに至ったのではないかと考えられる。また、初年次は入学直後という不安が、人と仲良くなり、人に認められたいという親和動機が強く働いているとされており（森・山田, 2009）、女子においてはその傾向が強く現れるのではないかと推察する。

続けて、「特性的自己効力感」については、今回の結果では変化が確認できなかった。「特性的自己効力感」は過去の成功と失敗の経験から形成され、個人差を持つとされており、同時に、特定の状況だけでなく、未経験の新しい状況においても適応的に処理できるという期待に影響を与えることが明らかにされている（成田ら, 1995）。したがって、本研究の調査時期は入学当初から前期末にかけて実施されているため、単位修得のためのハードルである前期末試験を経験しておらず、達成感を得る機会が限定されている。これによって、高校段階までの成功と失敗の経験を基に調査時の「特性的自己効力感」は形成されており、短い調査期間では変化が認めら

れなかったと推察する。高畑ら(2015)は看護学生の「特性的自己効力感」を学年別に比較し、1年生が最も高く、2年生および3年生で低くなり、4年生で再び高くなると報告している。これらを鑑みると、「特性的自己効力感」は年間を通すとといった長期的な影響を受けて変化する概念ではないかと推察される。

最後に、自律性欲求では男子の「独立」のみ有意に向上していた。男性は他者に依存せず、個人の考えで行動する性質が強い傾向であるとする報告(鈴木, 1994; 渡邊, 2017)を支持する結果となった。また、看護学生の自律性欲求と自尊感情、学習動機づけとの関連を検討した佐藤(2012)の報告では、4年制大学の「自己決定」および「独立」の両側面とも自律的動機づけと正の関係があることを報告している。さらに、各学年別での検討では、全学年で「自己決定」は自律的動機づけを高める結果であったが、「独立」は2年次でのみ同様の傾向であると明らかにされている。したがって「自己決定」の側面を高めることが望ましいと考えられるが、本研究の結果では「独立」のみが有意に向上していることから、学習動機づけの観点から見ると効果的な学びが実現しているとは言い難いものであった。本調査対象である医療系大学の学生は、4年次に資格取得のための国家試験を控えており、1年次から国家試験を強く意識づける指導法が取られている。特に学業面に関する厳しさや、国家試験受験資格を得るために必要な単位修得の難しさなど、国家資格を得ること(理想)とそれが簡単ではないこと(現実)のギャップに直面する。また、女子学生に比べて男子学生は積極的に競争に取り組むと言われており(長澤, 2000)、国家試験の受験資格を得ることや国家試験合格といった目標を達成するには、同じ目標を持つ周囲の学生(ライバル)よりも自己が優秀であることを示す必要がある。その周囲と情報共有したり、共に切磋琢磨するという意識が根付くことはなく、お互いに関わることなく自分独自の勉強の仕方や試験対策に取り組む傾向が強まったことによって、男子の「独立」の得点も高まったのではないかと考えられる。

## V. まとめ

大学新入生の共感性、共同体感覚、特性的自己効力感、自律性欲求の経時変化について、性別による違いを考慮した検討を行った結果を以下のようにまとめる。まず、「個人的苦痛」における男子と女子の調査初回時には差がなく、最終回時には男子よりも女子の方が高いことが確認できた。女子においては男子と比して共感性が高い結果となったが、「個人的苦痛」は特性不安や社会不安と有意かつ正の相関関係にあるとされており(日道ほか, 2017)、過度な共感性は不安を助長させる可能性があるため注意が必要となる。一方で、男子の「個人的苦痛」は前期期間を通して有意に低下した。「個人的苦痛」は攻撃性を抑制する側面も有するとされているため(H. マーク, 1994)、男子においては意識的に高める必要があるのではないかと考えられる。次に、「所属感・信頼

感」については、前期期間を通して女子にだけ有意な向上が認められた。共同体感覚は、自己愛傾向と有意な正の相関があるとされている(高坂, 2011)。したがって、女子は大学生活を通して「所属感・信頼感」を獲得することにより、自分自身に対する肯定的な感覚を維持・向上させているのではないかと考えられる。最後に、男子の「独立」は向上したが、女子には確認できなかった。先にも示したように、特に男子は独立した行動をとる性質が強い傾向があるため、他者との協力が必要な場面で自己を強調し過ぎるコミュニケーションエラーが生じ、誤解を受けてしまうことが考えられる。したがって、男子の自己中心的な行動の背景には、他者に従わずに自律的でありたいという欲求が潜んでいることを理解しておく必要がある。このように、性別ごとの心理的特徴を考慮するとともに、対人コミュニケーションを良好にするためのサポート体制を充実させる必要があるのではないかと考える。

## VI. 今後の課題

本研究の結果は、1大学の新入生を対象に質問紙調査を実施したものであり、全ての大学新入生に当てはまる知見であるとは言えない。そのため、今後は複数の大学新入生を対象とした調査を行う必要があると考える。これによって、より一般化した大学新入生の心理的傾向を把握することができる。また、本研究は短期的な期間に着目したものであるため、確認できた心理的要素の経時変化は僅かなものであった。したがって、大学生の能力の向上を促す実践を検討するためには知見が不足しており、より広範な変化を捉えることが必要になるだろう。例えば、本調査協力者を4年次まで追跡調査を行い、長期的な期間での経時変化を捉えることも一つの方法であると言える。各学年次での経時変化を確認することができるため、特にサポートが必要となる学年を把握することが可能となる。さらに、性別による経時変化も合わせて追うことが可能であるため、より包括的な知見の蓄積に期待ができる。これらを踏まえ、今後は縦断的な研究を行う必要があるのではないかと考えられる。

## 引用文献

- 安藤史高(2005) 大学コミットメントと自律性欲求・学習動機づけとの関連. 一宮女子短期大学紀要, 44, 91-99.
- 安藤史高(2006) 自律性欲求と仮想的有能感との関連について. 一宮女子短期大学紀要, 45, 121-128.
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 福島朋子(1997) 成人における自立観: 概念構造と性差・年齢差. 仙台白百合女史大学紀要, 創刊号, 15-26.
- 濱名篤(2007) 初年次教育を中心とする継続型教育プログラムの開発と質的保証に関する国際比較研究. 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究

- B).
- 濱名篤 (2008) 初年次教育の必要性と可能性. 大学と学生, 54, 6-15.
- 日道俊之・小山内秀和・後藤崇志・藤田弥生・河村悠太・Davis, Mark H・野村理朗 (2017) 日本語版対人反応性指標の作成. 心理学研究, 88 (1), 61-71.
- 広沢俊宗 (2007) 大学新入生の適応に関する研究 (1): 学習面での適応 - 不適応に関わる諸変数の検討. 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138.
- 井芹まい (2017) 大学生の共感性研究の同行. 早稲田大学大学院教育研究科紀要, 24 (2), 99-107.
- 経済産業省人材力研究会 (2018) 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」報告書. [https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001\\_1.pdf](https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf), (参照日 2021 年 6 月 11 日).
- 高坂康雅 (2011) 共同体感覚尺度の作成. 教育心理学研究, 59, 88-99.
- 高坂康雅 (2012) 大学生における共同体感覚と社会的行動との関連. 和光大学現代人間学部紀要, 5, 53-60.
- マーク・H・デイヴィス (1999) 共感の社会心理学 - 人間関係の基礎. 川島書店.
- 松浦均 (2006) 援助行動発動時における社会的スキル, 共感経験, 援助行動経験の影響について. 応用心理学研究, 31 (2), 76-88.
- 文部科学省中央教育審議会 (2018) 2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申). [https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt\\_koutou01-100006282\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf), (参照日 2021 年 6 月 11 日).
- 文部科学省中央教育審議会 (2008) 学士課程教育の構築に向けて (答申). [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf), (参照日 2021 年 6 月 11 日).
- 森朋子・山田剛史 (2009) 初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセス - 学生同士の〈足場づくり〉を中心に. 京都大学高等教育研究, 15, 37-46.
- 長澤光雄 (2000) 大学生の体育における競争の認識に関する一考察. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 22, 31-39.
- 内閣府人間力戦略研究会 (2003) 人間力戦略研究会報告書: 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～. <https://www5.cao.go.jp/keizai/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf>, (参照日 2021 年 6 月 11 日).
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討 - 生涯発達の利用の可能性を探る -. 日本教育心理学研究, 43, 306-314.
- 日本学生支援機構 (2007) 大学における学生相談体制の充実方策について - 「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」 -. [https://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/09/jyujitsuhausaku\\_2.pdf](https://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/_icsFiles/afieldfile/2015/12/09/jyujitsuhausaku_2.pdf), (参照日 2021 年 6 月 11 日).
- 野田俊作 (1988) アドラー心理学トーキングセミナー性格はいつでも変えられる. 星雲社.
- 大石美佳・松永しのぶ・伊藤嘉奈子・鈴木公基・前野澄子 (2007) 「青年から大人への移行期」の自立意識に関する研究: 大学生の自立意識の構造とその実態. 鎌倉女子大学学術研究所報, 7, 55-73.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008) 大学生の自立の構造と実態: 自立尺度の作成. 日本家政学会誌, 59 (2), 461-469.
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 -. 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 佐藤美佳 (2012) 自己決定理論の視点に基づいた看護学生の自律性欲求と自尊感情、学習動機づけとの関連 - 教育課程・学年別比較 -. 八戸短期大学研究紀要, 35, 53-71.
- 鈴木淳子 (1994) 脱男性役割態度スケール (SARLM) の作成. 心理学研究, 64, 451-459.
- 高畑正子・大川明子・梅田徳男 (2015) 看護大学生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響 - 学年間の比較 -. 中京学院大学看護学部紀要, 5 (1), 27-39.
- 渡邊寛 (2017) 多様化する男性役割の構造 - 伝統的な男性役割と新しい男性役割を特徴づける 4 領域の提示 -. 心理学評論, 60 (2), 117-139.